

# 知的に障害のある人たちのサッカー

【知的障害の概念】※国際知的障害者スポーツ連盟（INAS-FID）選手エントリーフォームの一部より

- 18歳未満の発達期に現れる
- 知能指数（IQ）が概ね70未満
- 年齢に比べ社会生活能力が低い
- 社会適応能力の欠如または障害

知的に障害のある人の多くは、以下の特徴もあります。各個人によりその特徴の現れ方は様々で、これらは障害特性のひとつと言えますが、環境要因や生育暦が深く関わるものもあります。

- 記憶する情報量が少ない
- 別々の動作を一度に行なうことが苦手
- 状況の判断が遅い
- 未経験の場面に対応することが苦手
- 空間認知能力が低い

【知的障害のある人たちのスポーツ活動の現状】

一般的に障害のある人たちは、年齢が若いほどスポーツを経験する機会が少ない傾向にあります。

また、社会的な背景として、知的に障害のある人たちのスポーツの発展は、身体に障害がある人たちに比べて遅れているという現状があります。

その理由の一つは、継続的な運動経験や自分に合った環境でのスポーツ活動を行なうための選択肢が少ない傾向にあることです。

【横浜市の取り組み】

様々な普及や強化、イベントの実施から「評価」「検証」を繰り返し、長期的視野に立ち知的障害のある人のサッカー活動の定着を図ってきました（時系列で項目のみ記載）。

1999年…FIFAワールドカップ決勝戦の横浜開催決定を契機に「**障害者サッカー育成事業**」を実施

2001年…小学生と中学生年代を対象とした「**ジュニアサッカー教室**」を展開

2003年…知的に障害のある人たちのサッカーの振興に「協働」で取り組む

（横浜F・マリノス・障害者スポーツ文化センター横浜ラポール・（財）横浜市体育協会）

2004年…国内初のJリーグチームによる「**横浜F・マリノスFuture**」が活動を開始

2010年…チーム結成7年目を迎える

【今後に向けて・・・】

横浜市の取り組みはあくまでも一例であり、それぞれの地域により取り組み方は当然異なります。

まずは、国内組織の充実により、様々な取り組みについての情報を共有できる環境が整備され、全国各地にその輪が広がっていかねばなりません。

そして、そうした環境の整備によってサッカーを通じた社会参加や自立を期待することができます。

「いつでもどこでもだれとでも」サッカーをできる環境を整えていくことは、知的に障害がある人たちにとって「生活の質の向上」に有効な一つの手段となるプログラムを提供していくことにつながると同時に、スポーツ活動の選択肢を拡げることとなるでしょう。そのために何をするか、何ができるか、継続的に取り組んでいくことが大切です。